

区民との協働で未来をつくる

将来像を共有する 「新しい自治」



住宅都市に農が生き ている街

日差しが暖かな昼下がり、二三男くんは23区を一気に縦断し、練馬区を訪れていました。都心の光景は、70年前からやってきた二三男くんにとっては驚きばかり。高層ビルが林立し、大勢の人たちがひしめき合う街の風景に圧倒されてしまいます。ところが、練馬区に入ってから

二三男くんはあることに気づきました。「畑があるー!」

ここには、みどり豊かな住宅地に都市生活と融合した生きた農業が存在していました。そこでは農家の方が野菜を育てていました。

とある駅前で、二三男くんは人だかりを見つけました。そこでは、お

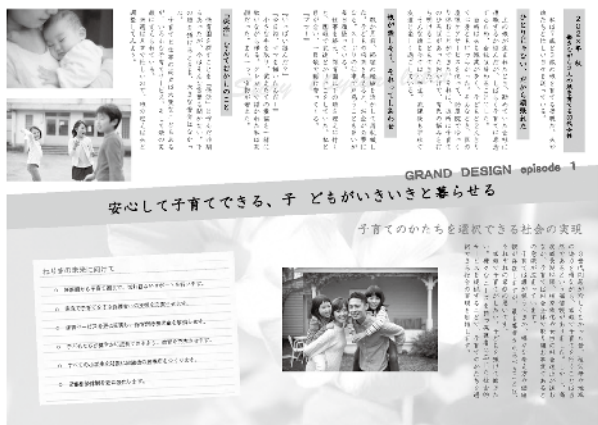
しゃれなデントの下でたくさんのみずみずしい野菜やお花が売られています。

「この野菜は、どこで採れたんですか」

二三男くんが尋ねると、販売員さんは「ここですよ。練馬産の採れたて野菜です」と答えました。近代的な都会にまだ農地が残っている。二三男くんは俄然、この練馬区に興味を湧きました。

みどりの風吹くまち ビジョン・アクション プラン（素案）、グランド デザイン構想（素案）

練馬区役所を訪れた二三男くんはさっそく、区政資料が集まっている「区民情報ひろば」を訪れました。



「ソーゴーセンリヤクつてのを読みたいんですが!」

窓口の職員は、にっこりと笑って、「地方版総合戦略のことです

冊子を右からめくるよ、「暮らしのグランドデザイン」を読むことができます

ね。そのままの名前の計画はありませんが、それに位置付けられている計画がありますよ」と、二三男くんは1冊の冊子を渡してくれました。『みどりの風吹くまちビジョン・アクションプラン（素案）』で、2017（平成29）年12月に公表されました。職員は「できたばかりです。今年度中に成案になる予定ですよ」とほほ笑みました。

区は2015（平成27）年3月に、基本計画である「みどりの風吹くまちビジョン」、同年6月に、実施計画である「アクションプラン」を策定しました。このビジョンとアクションプランを合わせて、練馬区の地方版総合戦略として位置付けられています。



今回のアクションプランは、これまでの進捗状況や社会経済情勢、区民ニーズの変化を踏まえ、新たに策定したもので、計画期間は2018(平成30)年度から2019(平成31)年度です。

職員は、『グラントデザイン構想(素案)』も渡してくれました。「こちらは、来年度中に成案になる予定です」

区は、目指す将来像を区民の皆さまと共有しながら、様々な課題に取り組むことが不可欠だと考えています。グラントデザイン構想では、おおむね10年後から30年後の将来像が、「暮らし」「都市」「区民参加と協働」の三分野から示されています。いわゆる行政計画ではないため、将来像の実現に向けた具体的な取組や事業は、「みどりの風吹くまちビジョン」や「アクションプラン」で明らかにされる予定です。

二二男くんはさっそく、2冊の冊子を読んでみることにしました。

練馬の未来を描く グラントデザイン

まずは『グラントデザイン構想(素



冊子を左からめくると「都市のグラントデザイン」を読むことができます

案』を読んでみましょう。

右からめくってみると、暮らしのグラントデザインが書かれています。「子育て」「高齢者福祉」「障害者福祉」「生活福祉」「健康づくり」「文化芸術」「みどり」「都市農業」の8つのテーマごとに、10年後の暮らしの姿が、区民の物語として描かれていて、テーマに対する「区の基本姿

勢」と「取組の方向性」が示されています。

二二男くんは、「区民の物語」に引き込まれました。行政が示す「将来像」といえば、難しい文章になりがちですが、物語なので読みやすいですし、日々の暮らしと重ね合わせて未来の暮らしを考えることができます。テーマごとに、区がどう考えているのか、どんなことに取り組んでいくのか、見開き1ページで知ることができます。

次に、左からめくってみると、都市のグラントデザインです。「魅力にあふれ利便性に富んだ駅前と周辺のまち」「みどり豊かで快適な空間を演出する道路」「生きた農と共存するまち」「みどりあふれる中で多彩な活動が展開されるまち」という4つのテーマごとに、30年後のまちの将来像が、まちの鳥瞰図と4つの具体的なまちの絵で表現されています。

例えば、「生きた農と共存するまち」では、人の目線から見た「農のある風景」「農とのふれあい(果樹あるファームなど)」「地場農産物のマルシェ」「農と共存する住宅地」

の姿が描かれています。

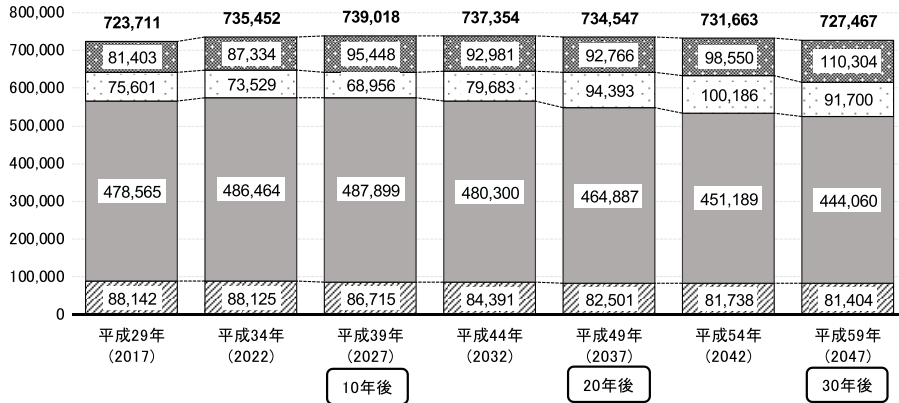
「地場農産物のマルシェ」を見て、二二男くんは思わず、「あっ!」と叫んでしまいました。二二男くんが見た駅前での農産物の販売は、このマルシェだったようです。

最後に、2つのグラントデザインに挟まれたページには、区民参加と協働のグラントデザインが書かれています。「暮らしのグラントデザイン」と「都市のグラントデザイン」で示した将来像を実現するためには、区民参加と協働を根幹に据えて、ソフトとハード両面にわたるインフラ整備に取り組むことが不可欠です。「練馬ならではの新たな自治の創造」を目指し、地域の現状と課題、そして地域の現場で生まれ始めた、協働の取り組みを踏まえ、区民や団体と区が協働して、試行錯誤しながら手探りで進めていくための方策が明らかにされています。

子育て世帯の多いまち

では、『みどりの風吹くまちビジョン・アクションプラン(素案)』を読んでみましょう。ここでは最初に、練馬区の将来人口推計と具体的な取

■区の将来推計人口



□年少人口(0-14歳) ■生産年齢人口(15-64歳) □前期高齢者人口(65-74歳) ■後期高齢者人口(75歳-)
 ※端数処理のため、4区分別人口の合計と総人口が一致しないことがあります。【出典】企画課「地域別推計(平成29年7月)」

り組みが示されています。
 練馬区の人口を2008(平成20)年以降で見ると、2010(平成22)年から2012(平成24)年までは停滞しましたが、2014(平成26)年以降、増加ペースが加速しています。前期アクションプラ

ンを策定した2015(平成27)年と2017(平成29)年と比較すると、わずかに2年の間に約9千人も増加しています。

周辺自治体との比較を見ると、総世帯に占める「15歳未満世帯員」の割合は16.5%で、周辺自治体と比べて練馬区が子育て世帯の多い自治体だと言えます。

今後30年間の将来推計人口を見ると、総人口は今から10年後の2027(平成39)年頃に約73万9000人に達し、その後減少に転じます。30年後の2047(平成59)年には72万7000人ま



生産者が旬の農産物を販売するねりマルシェ



口の比率が上がっています。2017(平成29)年時点では一人の高齢者を現役世代(生産年齢人口)3人で支えていましたが、30年後の2047(平成59)年には現役世代2人で一人の高齢者を支えることになるのです。

ねりマルシェ

では、具体的な取り組みを見ていきましょう。

計画とそれに基づいた具体的な取り組みが網羅されています。



「二三男くんがまず目を付けたのは、「練馬の都市農業の特色を活かした魅力の発信」に盛り込まれた「ねりマルシェの開催・支援」でした。「マルシェ」では、旬の練馬産農産物を農業者自らが販売しています。生産者から直接買うことのできる安心感や、食材に関して生産者と直接話ができ

で減少します。人口では2017(平成29)年を上回っていますが、注目すべきは年齢構成です。年少人口、生産年齢人口の比率が下がり、高齢者人口、後期高齢者は人



区民参加でみどりを守る方策を考える「みどりの区民会議」

ることなどが魅力です。区は、農業者などが実施する魅力ある「マルシェ」を「ねりマルシェ」として支援しています。

練馬区では、区主催だけでなく、

農業者と商業者主催のマルシェもたくさん開催されています。女性の農業者や商業者で開催したり、平日の夕方から夜にかけて開催したり、それぞれ工夫を凝らした様々なコンセプトのマルシェが開催され、地域の人たちとの交流が進んでいるのです。

さらに、地域への愛着を深めるため、西武鉄道が主催して石神井公園駅でマルシェを開催しています。

練馬区は生きた農業と都市生活が融合する世界でも希有な都市です。このような都市の魅力と可能性を世界に発信し、都市農業をさらに発展させていくため、2019（平成31）年に都市農業について特徴的・積極的な取り組みを行っている都市を招聘し、世界都市農業サミットを開催します。

みどりの区民会議

二三男くんがもう一つ注目したのが、「みどりあふれるまちづくり」に盛り込まれている「みどりの区民会議（区民協働によるみどりの保全創出）」です。

練馬区が誇るみどりは、区民生活

に潤いや豊かさを与えるものである一方、日照阻害、枝葉の張り出しや落葉などの課題があります。また、みどりの多くを占める民有地のみどりを個人で守っていくにも限界があります。このような状況にある練馬のみどりを区民の財産として将来にわたり守り育てていくための方策を区民参加で考え、具体的な行動につなげるため、区は2016（平成28）年10月に「みどりの区民会議」を設置しました。

区民会議の委員26人は、様々な立場の区民や地域活動団体、事業者で構成されています。区は、区民会議での討議内容や意見を踏まえ、みどりの管理のあり方をまとめ、地域のみどりを守り育てる新しい仕組みづくりを進めています。

二三男くんは「これぞ、区民参加と協働を掲げる練馬区ならではの取り組みだ」と感心しました。

区民参加と協働を根幹に据えて

『グラウンドデザイン構想（素案）』と『みどりの風吹くまちビジョン・アクションプラン（素案）』の2冊

を読んで、二三男くんは、グラウンドデザインで区民と共有した将来像を、区民参加と協働を根幹に据えて実現していこうという区の基本姿勢を学びました。

「練馬区は都心から近くて、便利な街というだけでなく、農地やみどりが共存しているからこそ、住みやすい街として子育て世帯がたくさん住んでいる。農地やみどりは区がただ守っているというだけでなく、区民や生産者、事業者が手を携えて守り、育んでいる。それができるのは、行政がまちの将来像を区民と共有し、未来に向かって進もうとしているからだ。これから区が育む『新しい自治』の行方が楽しみだ」

二三男くんは、練馬区の未来に希望を抱きながら、再びマルシェに買い物に出掛けました。

